

# 私の博物誌

題字 石川進

第四十三回

「海」①

漁港の匂いがなつかしく思う日が続いている。

タイミングが良く、妹達と会う用事ができたのを機に一時間程早く四倉港へ向かった。立春を過ぎて五十日余りにもなるが、天の神は虫の居処が悪いのか、風は冷たいままだ。

港に入って車を止めた場所は、五十年程前は国道6号から三、四十メートルばかり沖の、海の中だつたところだ。遠浅とはいえ、私の背丈など楽に沈む水深のあったところだ。

突堤の先端に近いところへ歩を進めると、夕風には少し早いのだが、波がなくて静かだ。

ずっと沖の方へ目をやると、南に向かう大型のフェリーボートが雲間からの陽光を受け、白く光りながら進むのが見える。

さほど広くはない港の中には、止まった潮が小さな波を呼び覚ます。外海を直接呑吐するブロックと、ひとつ入ったブロック

の水は少しだけ色が違う。

辺りに漂うのは、潮の香りと数羽のウミネコの声だけだ。

海面の光を縫って海底に目をこらすと、震災前とは全く別の風景が横たわっている。大小の瓦礫が無秩序に転がったままなのは、おそらくその部分だけではなさそう

だ。なおも目をこらし、漣の合間を探すように眺めてみると、かすかに動く潮に揺られて、数株の褐藻がメデイウスの髪を思わせる。

四倉に住む妹の話では、近ごろの釣り人は大きな鯿を釣り上げるらしいというのが、地震、津波、放射線の附録としては、あまりにも小さきに過ぎよう。

潮が少し動き、差し込み始めたようで、露出していた牡蠣もほとんど水没した。「採って食べたいな」と腹の中で思いはするが、切り立った防波堤から海に入ること

は、子供のころの岩肌や防波堤など、迎いかまわず貼り付いていた胎児(シユウリ)は、目の届く限り見えない。

北へ向かって歩いてみる。昔は毎日のように見た造船場の跡は、レールが捻じ曲がったままで残っている。干からびた数種の海藻と、海面スレスレに残るアオサが禿げ頭のように、こびり付いているだけだ。

艦装のために使用された斜面を迂回し、なお北に向かうと、ペットボトル、コーヒー、ジュースなど、ありとあらゆるカンやビンなどのゴミが、好き放題の態で散乱している。これは一部の日本人の心の貧困を映した鏡だといつていい。

五十年前、私が四年間叔母の世話になって働いた四倉は活気に満ちていた。造船場は当時、木造から鉄鋼船に移行中だったが、なおも木の香を漂わせ、新造の木造船を浮かべたのを思い出す。目の前にある不釣り合いに、大きな娯楽設備の前の何と貧



ひっそりとした四倉港の中のカモメ



昔の面影を残す、古い防波堤と田之網の磯

しい風景であろう。

北に向かう防波堤は私の知っている一番古いもので、外海の波は先程より大きな音で碎けるようになった。数メートル沖で、建物と防波堤の間には津波の痕跡がそのまま残り、横に建つ娯楽設備とは水と油のようになり、そらぬ風で隣り合っているのが不思議だ。更に北に向かうと、行き止まりになるのは昔から知っていた。

小さな砂岩の小山が海面から突出し、岩肌には申し訳なさそうに黒松と藪椿が少しだけ残って咲いている。子供達が小さかったころ懐の軽さから、遊園地などはめつたに連れて行けず、目の下に控えめに残る田之網の磯で、親子四人がどれ程楽しく遊んだかしのれない。

享樂的な人工美には、私の心の針は全く感応しなかった。型は小さいが牡蠣の大発生は、明日の海への大きな期待を昔の海と同じように思わせる。



書いている人

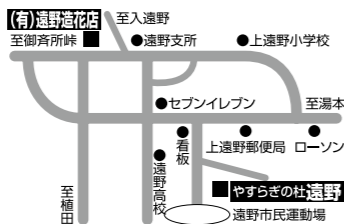


石川進

いしかわ・すすむ

一九四二年、いわき市平生生まれ。石川紋店代表。家業のかたわら、幼少から書に親しむ。書の世界で培った点・線・面と墨・紙・水の生理を追求し、石刻による印とのコラボによる抽象、具象の絵画表現を展開。書学書道史学会会員。書法探求顧問。

故人を送る厳粛な儀式。祈る心を真心こめて  
やすらぎの杜遠野がお手伝い致します。



やすらぎの杜 遠野  
〒972-0161 いわき市遠野町上遠野赤坂27-1  
TEL.0246-89-4777



KAMOME CLINIC

虎の門病院医師ネットワーク会員

人工透析施設

医療法人 **かもめクリニック**

理事長 金田 浩

かもめ・みなとみらいクリニック  
横浜市西区みなとみらい3-6-3MMパークビル3F TEL.045-228-2212

かもめクリニック  
いわき市草木台5-8 TEL.0246-28-1010

かもめ・大津港クリニック  
北茨城市大津町北町字深田432-1 TEL.0293-46-0133

かもめ・日立クリニック  
日立市東滑川町1丁目3186 TEL.0294-25-1531